

## グループサイコセラピストとは何者か

武井 麻子\*

第29回大会のシンポジウムの企画を聞いたとき、この企画は実現するはずはないと思った。なにしろ9人ものシンポジストが壇上に上がるというのだから。学会のシンポジウムというものは、4人以上のシンポジストがいる場合、続けて発表を聞くだけでもたいへんで、焦点がぼけてしまうとかねがね思っていた。しかも学会の最終プログラムということが多いので、聴衆はたいいてい疲れきって睡魔に襲われることになる。

それに「若手」「中堅」「ベテラン」というくくりも、なんだか嫌な気がした。まして自分がベテランの中に入れられるのは、年齢を考えるとやはり仕方がないかと思うのだが、いつもはそれを忘れて（否認して？）いるので、わざわざ現実認識を迫られたような気がしたのだ。気持ちはいつも若手、というのは無理だとしても、せいぜい中堅といったところだ。最終的に依頼された役割は「指導者グループ」ということだった。これまた、「指導者」？ 私の脳裏には、遠くを指さす巨大な金日成像が浮かんだ。私はどうやら指導者というものに誇大な期待と怖れを抱いているらしい。

しかし看護の分野では、「ベテラン看護師」という言葉はほぼ「中堅看護師」と同義で使われるし、「指導者」といえば「臨床指導者」のことで、学生の実習を担当するスタッフ。新人も数年すれば指導者となる。「熟練看護師＝エキスパートナース」という言葉もあるが、これもまた中堅看護師以上となるか。つまり、ベテランだろうか指導

者だろうが、さして騒ぐほどのことではない。と、思い直して引き受けることにした。

だが、具体的なことは前日まで知らされず、大会初日に開かれた懇親会会場の片隅で打ち合わせが行われ告げられたのは、その場でお題をいただいて、即興で答えるというものだった。そのときイメージしたのは、テレビ番組の「笑点」だった。究極の「Here & Now」で、いかにもサイコドラマの高良先生らしい発想ではあるが、なんだか壇上でさらし者になって笑われるというイメージがぬぐえなかった。

そして、当日。壇上にあげられ、若手グループから順にお題が与えられた。具体的なお題は覚えていないのだが、どうやら「グループサイコセラピストにとって重要なのはもとの素質（センス）なのか、トレーニングなのか」を問うものだったような気がする。この問いはまた、セラピーにとってセラピストのセンスというものが重要だが、それはトレーニングによって磨かれるものなのか、すなわち教育可能なのかという問いでもあるだろう。そこには、理論や技法を学ぶことで磨かれることもあるのだろうかという問いも含まれる。おそらく大学教育に携わっている高良大会長だからこそ、問いかけなのだろう。それは私がかかわっている看護師の教育にも共通する問いである。

壇上では、一生懸命考えて答えようとする若い人たちの持ち時間が余ってしまい、気まずそうに

What is a group psychotherapist?

\* 日本赤十字看護大学（〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-1-3）

Asako Takei RN, Ph.D.: The Japanese Red Cross College of Nursing, 4-1-3, Hiro-o, Shibuya-ku, Tokyo, 150-0012, Japan

しているのを見てハラハラしたり、気の毒に思ったりしながら、その一方で自分が新人の頃はステージ上で自分の思ったことをいうなんて、とてもできなかったなと振り返っては感心したりしていた。指導者グループは、しゃべりだすと時間が足りないほどだったが、これは、経験を積んでそうになったのか、ただおしゃべりな性格だったからかはわからない。どちらともいえるかもしれない。

これは今回のテーマとも関係すると思うのだが、経験が影響していたとすれば、グループを何年も体験していると、自分をどう見せよう、どう見られたいという意識が薄れてくる(ような気がする)ということがある。どうあがいても自分は自分でしかないし、それでも自分をいろいろに見たり評価したりする人はいるもので、自分ではそれはどうしようもないことだという、一種の達観が得られるようになった気がするのだ。もちろん、がっかりしたり、悔しかったり、恥ずかしかったりする気持ちが全くなくなるわけではないが。

そんなわけで、当日自分が何を口走ったかは忘れてしまった。ただ、3人の指導者グループの中でも、感じ方や考え方が違うことがわかったことだけは覚えている。何が違ったのかはもはや記憶にない。後半は、もう同じ問いの繰り返しのような気がして、壇上にいる者の意見よりも、フロアの方々が我々の反応を見たり聞いたりして何を感じ、何を思ったかをぜひ知りたいと思った。今でもそういう思いは残っており、学会誌であえてふたたびシンポジストが何か書くよりは、当日のフロア参加者に書いてもらったほうがよいのではないかと思う。

ところで、セラピストのセンスというものは教育可能なのか、可能だとすればどのようにという最初の問いである。その問いに対する答えは、いまだ見つからないままのような気がする。とくに大学という教育機関でそれが可能かという疑問は、重く残ったままである。